

沖縄本島三和村喜屋武地区、讀谷村高志保区、東村平良区に於ける

糸状虫症調査報告書

鹿児島大学醫學部 佐藤八郎、米澤藤士、尾辻義人
石川市 花城清喬

本報告書は琉球政府社会局の招聘により1954年7月19日より7月29日に亘り行つた糸状虫症調査に關するものである。

I 緒言

糸状虫症は熱帯、亞熱帯に廣く分布し、我國では九州の沿岸離島に多く、殊に沖縄は戦前、我國で第1位の濃厚浸淫地であつた。

今次大戦後、我國本土に於ける本症分布については概ね明らかとなつたが沖縄の分布状況については尙未詳である。唯、衛生研究所(1953)による國頭村での6.5%、花城(1954)による石川市及び恩納村での8.4%の報告があり、之を以前の報告に比較すると相当の減少をみたように思われる。

我々は琉球政府社会局の招聘により沖縄の戦後の本症調査をなした。本島を代表すると思われる三和村喜屋武、讀谷村高志保、東村平良に於て本症調査を行い、果して減少したか否かを確かめ、これに對する對策を考えたい。

II 調査地、調査日時及び調査方法

調査地は沖縄本島の南、中、北部の三地区を選んだ。南部は三和村喜屋武区を1954年7月16日～7月22日に亘り、中部は讀谷村高志保区を1954年7月23日～7月27日に亘り、北部は東村平良区を1954年7月28日～7月29日に調査した。

対象は可及的全員調査、最低は2ヶ月の乳兒から最高は82才の高令者に及ぶ。

調査方法…豫め用意した調査表により晝間各戸別訪問を行い、問診により有症者を調査した。仔虫検索は夜間10時以降に於て主として耳朶より3滴の血液を取り、各々濃厚標本にして主にギムザ染色を、一部はヘマトキシリン染色を行つて検索した。

III 調査成績

三地区に於ける有症者の總数は63例で、その内譯は第1表の如くである。

第1表

	患者数	検血人員	仔虫保有者数	仔虫検出率
象皮病	9	8	1	12.5%
乳ビ尿	2	2	1	50.0%
陰囊水腫	17	15	6	40.0%
熱発作	33	29	13	44.8%
リンパ腺炎	2	2	1	50.0%
計	63	56	22	39.3%

仔虫検索成績は第2表の如く 983例の検血で 194例(19.7%)陽性であつた。その中10才未満は12例あり、最低は2年1ヶ月であり、70才以上は6例あり最高は18才であつた。之に症状具有者を加えると、その感染率は喜屋武に於ては30%に及び、三地区の平均は23.8%であつた。

第2表

調査地	調査人員	仔虫保有者	仔虫検出率	症状具有者	症状具有率	感染者	感染率
喜屋武 (三和村)	277	72	25.6%	20	7.2%	85	30.1%
高志保 (讀谷村)	464	91	19.6%	23	5.0%	107	22.4%
平良 (東村)	242	31	12.8%	20	8.3%	43	17.8%
計	983	194	19.7%	63	6.3%	235	23.8%

家族感染は仔虫を證明した世帯数を示すと第3表の如く5人の仔虫保有者をみたのは6人家族、7人家族、9人家族の3世帯で、著明な家族感染が認められる。

第3表

調査地 患者数	喜屋武 (三和村)	高志保 (讀谷村)	平良 (東村)	計
0	25	38	27	90
1	28	38	20	86
2	9	14	4	27
3	3	2	1	6
4	3	1	0	4
5	1	2	0	3

(1) 喜屋武

有症者は第4表の如く20例あり、乳ビ尿患者はみなかつたが、象皮病患者は5例もあり、他の2ヶ村より多い。仔虫保有者は第5表の如く高令者程その検出率が高いが実数は10才代が多い。

第4表 喜屋武の有症者

	患者数	仔虫検 血人員	仔虫 保有者
象皮病	5	4	1
乳ビ尿	0	0	0
陰囊水腫	6	6	3
熱發作	7	6	2
リンパ腺炎	2	2	1
計	20	18	7

第5表 仔虫年令別保有状況(喜屋武)

	被検者数	仔虫 保有者	被検者数	仔虫 保有者	被検者總 数 男女	仔虫保有 者 總数
0~9	33	1	33	2	66	3
10~19	24	8	24	6	48	14
20~29	17	5	17	3	34	8
30~39	20	6	17	5	37	11
40~49	14	4	20	7	34	11
50~59	18	6	14	7	32	13
60~69	7	2	18	9	25	11
70以上	0	0	1	1	1	1
計	133	32 (24.1%)	141	40 (27.8%)	277	72 (25.6%)

(2) 高 志 保

有症者は第6表の如く23例あり、乳ビ尿患者が1例あつた。仔虫檢有者は第7表の如く喜屋武の場合と同じように高令者にその檢出率が高いが実数は10~20才代に多い。

第6表 有症者(高志保)

	患者数	仔虫檢 血人員	仔 虫 保有者
象 皮 病	2	2	0
乳 ビ 尿	1	1	0
陰囊水腫	9	7	2
熱 發 作	11	9	5

第7表 仔虫年令別保有狀況(讀谷村高志保)

	被檢者数 (男)	仔虫保有 者(男)	被檢者数 (女)	仔虫保有 者(女)	被檢者總 数(男女)	仔虫保有 者總数
0~9	68	4	63	4	131	8
10~19	55	12	52	6	107	18
20~29	31	8	34	11	65	19
30~39	15	7	28	6	43	13
40~49	18	7	28	4	46	11
50~59	22	5	20	3	42	8
60~69	13	4	12	7	25	11
70才以上	2	1	3	2	5	3
計	224	48 (21.4%)	240	43 (17.9%)	464	91 (19.6%)

(3) 平 良

有症者は第8表の如く20例あり、乳ビ尿患者は1例あつた。仔虫保有者は第9表の如くで、前2者と同じ様な傾向を有する。

第8表 有症者(東村平良)

	患者数	仔虫検査人員	仔虫保有者
乳心尿	1	1	1
象皮病	2	2	0
陰囊水腫	2	2	1
熱発作	15	14	6
計	20	19	8

第9表 仔虫年令別保有状況(東村平良)

	被検者数 (男)	仔虫保有者 (男)	被検者数 (女)	仔虫保有者 (女)	被検者 総数	仔虫保有者 総数
0~9	30	1	37	0	67	1
10~19	30	5	32	4	62	9
20~29	9	0	16	2	25	2
30~39	10	2	18	3	28	5
40~49	8	2	11	1	19	3
50~59	2	0	11	3	13	3
60~69	4	1	10	3	14	4
70才以上	4	1	5	1	9	2
計	97	12 (12.4%)	140	17 (12.1%)	237	29

IV 蚊の発生状況

第10表の如く糸状虫症傳播に最も適當だとされているアカイエカが80%以上にみられ、之が本島に於ける本症傳播に有力な役割を演じていると思われる。

第10表 三ヶ村に於ける蚊族発生状況

年月日	調査地	子虫匹数	種 別	成虫匹数	種 別	氣 温
1954 7.21	三和村 喜屋武	58	ヒトスヂシマカ 5 アカイエカ 43 シナハマダラカ 10	9	ヒトスヂシマカ 4 アカイエカ 4 シナハマダラカ 1	最高 29.2 最低 22.9 平均 26.0
1954 7.26	讀谷村 高志保	102	ヒトスヂシマカ 12 アカイエカ 80 シナハマダラカ 10	11	ヒトスヂシマカ 3 アカイエカ 5 シナハマダラカ 3	最高 31.4 最低 26.7 平均 28.9
1954 7.28	東 村 平 良	132	ヒトスヂシマカ 15 アカイエカ 108 シナハマダラカ 9	13	ヒトスヂシマカ 4 アカイエカ 6 シナハマダラカ 3	最高 31.8 最低 26.2 平均 29.0

V 沖縄に於ける糸状虫症対策

糸状虫症の防遏としては (1) 感染源である本症患者（無症状仔虫保有者を含めて）の絶滅。(2) 本症を感染する蚊の撲滅。この二つが根本対策である。

(1)の感染源の絶滅に関しては仔虫保有者を治療すればよい。この仔虫保有者の治療は我々の数年に亘る研究から スバトニン（ヘトラザン）を用いて集團治療をその地区の仔虫保有者全員について実施するならば日ならずしてその地区の本症は激減するであろう。

(2)の蚊族撲滅策は消極的に蚊の來襲を防ぐのみでなく、更に一步進んで媒介蚊の撲滅を圖らねばならぬ。蚊の発生を防ぐ爲に、蚊の発生する水域にメダカ、金魚等淡水魚を放養したり、石油、DDT 其他殺虫剤を撒布する。フモノチアシンは人畜無害であるので天水を使用するような所では適當と思われる。更に根本的に蚊の発生する水溜、湿地、溝等の排水工事、整地作業も必要である。

我々の周邊より蚊族を全部驅逐する事が出来れば理想であるが、現在の段階では不可能に近い。沖縄に於いても糸状虫症傳播の可能性のある蚊が人家周邊発生しているから、人家周邊の水溜、溝、人工容器等の除去をなすならば相當の効果を擧げ得るであろう。

結 語

沖縄本島に於ける糸状虫症は豫想に反して減少していない。新感染も行われている。寧ろ所によつては増加の傾向にあるのではないかとも思われ、速やかに根本的な対策の樹立を望むものである。

終りに本調査に当り琉球政府社会局山川局長、山城次長、花城公衆衛生課長の御厚意に深謝し、我々の調査に終始行を共にせられ御協力を惜しまれなかつた衛生研究所城間盛吉、上原直三兩氏に深甚の謝意を表する。